

『富山史壇』 第一九一号
二〇二〇年（令和二年）三月 越中史壇会

資料紹介

砺波・浄蓮寺の

木造五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像

尾田 武雄

砺波・浄蓮寺の木造五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像

尾田 武雄

はじめに

砺波市の教育委員会では平成二八年より、杉崎貴英氏（帝塚山大学准教授）の指導の下に市内の仏像等の調査を行っている。市指定文化財を主として、それに準じるものをリスト化し、指定文化財の仏像九体、未指定一九体、他に狛犬等が調査対象になった。

砺波市芹谷段丘上にある増山に浄土宗浄蓮寺がある。当市では珍しい江戸初期の浄土宗寺院であり、寛文三年（一六六三）に開鑿された芹谷野用水が当寺前にある。「貞享二年寺社由緒書」によると、寛永元年（一六二四）浄蓮社清誉上人開基とあり、「寺院明細帳 東砺波郡」（富山県立図書館蔵）には元浄蓮社といい、明治十九年に浄蓮寺に改称許可とある。なお、南砺市井波にも浄蓮社があり、寛永十八年（一六四二）の開基で、増山の浄蓮社を移して堂舎としたとある。平成三〇年三月二日の第三回調査で、杉崎氏の他、筆者や

砺波市教育委員会野原大輔学芸員等が浄蓮寺の調査をおこなった。浄蓮寺には、天照皇大神の本地仏として、この地方に多くある神明社の御神体である雨宝童子があり、庫裏玄關の棚上の厨子に安置されている。この像は芹谷用水の開削によってできた新村の神明社に安置されたご神像と推察され、寛文年間以降の造像であろう。

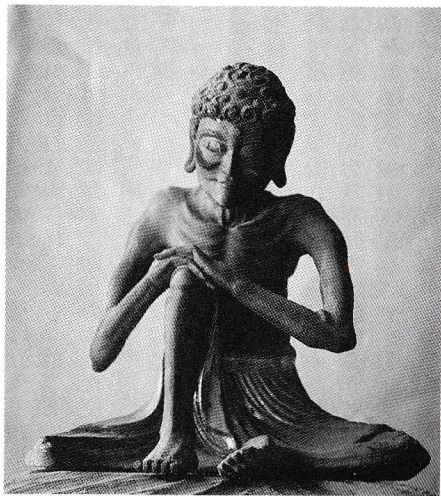
さらに、本調査で当寺の本堂須弥壇に浄土宗寺院には珍しい木造五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像が安置されているのを発見した。五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像は、石仏として富山県東部、特に立山町、富山市旧大山町周辺に多く見られるが、木像の存在は多くは無い。そのような状況で、県西部での発見は珍しくここに報告しておきたい。

一 五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像

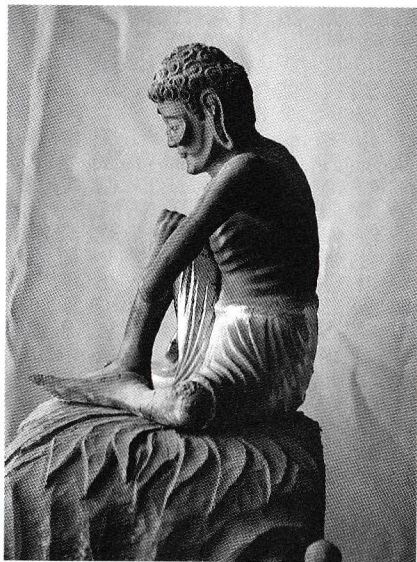
真宗門徒には馴染み深い「正信偈」の冒頭に「帰命無量寿

如来 南無不可思議光 法蔵菩薩因位時」とあり民衆には親しまれている法蔵菩薩である。

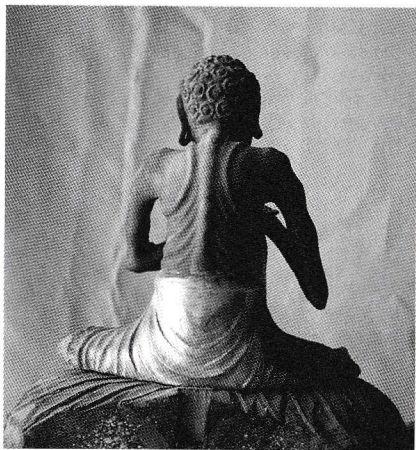
法蔵菩薩は「ある国王が国と王位を捨てて沙門となり、法蔵比丘（菩薩）と号して、世自在王仏のもとで諸仏の浄土の因を親見し、五劫のあいだ、思惟して四十八願を選び取り、兆載永劫にわたる修行の結果、十劫の古えに無量仏となり、現に西方の安樂世界に在しますと説く」と説かれてあり、阿弥陀如来の修行されている姿が法蔵菩薩とされている。即ち阿弥陀如来が法蔵菩薩のとき、浄土の建立と一切衆生の救済を願う大願を、五劫にわたって思惟をこらし修行したとされたお姿が五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像である。像容



【図1】五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像正面



【図2】五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）側面



【図3】五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像背面

は奈良五劫院や京都大蓮寺のような結跏趺坐し螺髪を大きく湛えている姿が一般的に知られている。長い間の思惟で髪が伸びたとされ、肉付きは良く、幼子のような肥満な体軀である。石仏では京都金戒光明寺（浄土宗）や知恩寺（浄土宗）墓地に見られる。

二 淨蓮寺の五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像

ところが淨蓮寺に安置されるお像は、一見してエキゾチックな姿態で、ガンダラ風の苦行釈迦像のように頬はこけ、下腹部がへこみあばら骨がくいこみ、やせ細りいかにも憔悴した苦行の瘦せ仏である。総高四七・三センチで頭には螺髪、肉髻があり如来像であることがわかる。坐像で左足を立て、その立膝にやせ細った右手を添え左手をその上に置き、あばら骨がくつきり見え、腰に金色の裳を巻き、首をやや左に傾け思惟のお姿である。像の側面もあばら骨がくつきりと見え、背面は痛々しいほど背骨が浮き出ている。富山市南部の個人宅に保管される木造の五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像は、台座下部に台車が付けられ、背面も拝見できるようになっていた。この像も同様に丁寧な作りである。ただ残念にも、当日立会いされた檀家代表とされる隣家の方は、須弥壇上の釈迦如来坐像の前にあるにもかかわらず、この木像の存在は意識されてはいなかった。

三 五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像の広がりと意図

このやせ仏の憔悴像した五劫思惟の法蔵菩薩（阿弥陀如来）の石仏は富山市東南部の旧大山町周辺に多く十体がある。他の立山町に四体、旧富山市内二体、旧婦中町二体、旧山田村一体、上市町に一体があり、家や寺院の内仏として木像が旧大沢野町に二体、黒部市に一体ある。旧山田村柳川には台座に「法蔵菩薩尊像」、旧婦中町に「寶（法）蔵菩薩」、富山市浜黒崎平榎には「五劫思惟阿弥陀如来肖像」と銘が入っている。ちなみに香川県香川郡塩江町焼堂のやせ仏安置堂前の標柱に「五劫思惟阿弥陀」とある。

富山市上滝の大川寺公園口の大きいお堂の中に、二棟の祠がある。向かつて右側には浮き彫りの地藏立像が二体安置され、向かつて左側にやせ仏の法蔵菩薩がある。全身が金で、衣文は黒、光背の中は青で着色されている。右足を立て、そこに両手を置き、その上に頭を置く姿態である。これは高さ六七センチ、幅三〇センチのやや大ぶりの石仏である。

管見であるが、このような像が全国に六、二体確認している。石仏では二三体の富山県が飛びぬけて多く、木造も富山県の五体に次いで広島県に多いことがわかり、愛知県碧南市にもある。また真宗の篤信者の多い、北陸、薩摩、三河門徒の愛知等に見受けられる。憔悴像は真宗地帯に伝えられたもので

あることが理解できる。また石仏は庶民の営為によるもので、木像がモデルにされたものと推察される。

井上見淳氏は、肥後で五劫思惟の法蔵菩薩が肥満であるか、憔悴であるかの論争が江戸時代末期に起こっていたことに論究されている。要約すると、肥後において「二明星」といわれた二人の学匠がいた。能令速満師（一八一二—一八六）と鬼木沃州師（一八一七—一八四）であり、二師は同門であり後年ともに勧学になつてゐる。

この二人による五劫思惟の法蔵菩薩の身形が肥満か憔悴かとの論争があつた。発端は文久二年（一八六二）隈庄雲晴寺の法座で沃州師の説教にある。下関の某寺より伝わった憔悴の仏像を五劫思惟の法蔵菩薩として仰ぎ、講会の本尊としていた。その五劫思惟の法蔵菩薩は肥後の地では僧俗ともに広く認知され、法蔵菩薩は五劫思惟を経て憔悴したとする理解が深く浸透していたようである。沃州師は席上で、突如五劫思惟の憔悴義を宗義に根拠のない憶測であるとし五劫思惟尊形肥満説を展開された。これは学林にも問い合わせが行く騒動に発展していくのである。この論争に、翌年文久三年（一八六三）龍華学派の碩学遠藤玄雄師が介入する。師は文久二年の前年に年預勧学を務めているので学林からのアクションで、沃州師は憔悴像の支持を打ち出されている。

熊本は環中以来「肥後轍」といわれ真宗の盛んな風土である。憔悴説を主張した能令速満は明治一七年勧学に職に補さ

れ、暫時本山大教授に任じたが、多くは郷里に在つて私塾龍川閣を開設して学生を教育し、門人も三百余人に及んだという。天性学を好み会説に長じたとされている。憔悴した像を五劫思惟阿弥陀如来（法蔵菩薩）坐像についても、その門人らによつて語り継げられたのであろう。そして私塾のネットワークで全国に広まったのであろうと思われる。

旧山田村柳川（現富山市）の石仏は、路傍の石祠の中に安置されている。「(前略)これは次の願いが込められている。人間は生まれながらにして悪人はいない。しかし實際この世の中には心の迷いから五逆（五つの最も重い罪悪）をなすものが絶えない。悪のない明るく住み良い世の中を作るには先ず悪人を救わなければならない。悪党たちの心をいかにして善の方向に向けるか、世のすべての人々を救うためにもいつまでもこのことを考え続けなければならない。亀田翁のこの思いを世人に親しみやすい菩薩に託したもので、頬に手を添えて考えにふけるその姿にはその思いが強く表れている。冬取り付けられる板の雪垣には墨で『五劫思惟の本願は？偏えに私一人の為』と書かれてあり、この菩薩の性格を表現したものとと思われる」とあり、これは『歎異抄』第十八条に通じるものである。

なお関山和夫氏は、「節談説教の芸能性」の文中で丹羽文雄氏の小説『青麦』の中から「上手な説教師は自由自在に善男善女の感情、心理をあやつることができた。質問されるこ

とはなかった。『聖人つねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり』というところでは、唯一の泣かせどころのように、浪曲かおまけの節まわしでうなった。さんざん翻弄され、いい気持ちにさせられた参詣者は、ひとりのこらげ仏にたすけられたような気持ちになってしまふのである」とある。このように五劫思惟の弥陀に対し、庶民は感謝報恩の心情を強く抱いていたのだらうと思われる。五劫思惟阿弥陀如来(法蔵菩薩)坐像、いわゆるやせ仏は庶民の真宗門徒の中に培養されてきたのであろう。

四 真宗と五劫思惟阿弥陀如来の関わり

阿弥陀如来像の名品とバリエーションについての基本文献である奈良国立博物館編『阿弥陀佛彫像』(東京美術、一九七五年)で執筆者の光森正士氏は「五劫思惟阿弥陀像」について、「五劫思惟の阿弥陀像は、まるで笠をかぶつたような長大な螺旋をもつことに特徴がある。(略)髪が長大になつてゐるのは、五劫という長い間、思惟三昧にふけり、理髪を行わなかつたのでかかる姿になつたことを示しており、(略)なお、五劫思惟の阿弥陀像と称するものの中で、身には腰部に小さな裂(裾)を纏うのみで、ほとんど裸形とし、非常に痩せ細つた体軀をもち、片膝を立て、両手でこれを抱

てしまつた。五劫思惟阿弥陀如来(法蔵菩薩)坐像の存在もほとんど忘れられている。

おまけ

今回、調査したのは真宗地帯にある浄土宗寺院の淨蓮寺で、彩色された木像である。なぜこの寺院にあるのか由来も伝承もなく全く不明であるが、今後の課題である。また五劫思惟阿弥陀如来(法蔵菩薩)坐像は、県東部の浄土真宗本願寺派寺院系の強いところに多々見受けられ、県西部の真宗大谷派の寺院多い地域には石仏や木仏の存在は確認されていなかった。この発見は意義深い。これを機に報告する事により全国的に調査が広がることを希求している。真宗寺院のみならず、各寺院や家庭の仏壇の中に安置されているかもしれないことも提示したい。淨蓮寺のように偶然に発見できる場合もある。このようなやせ仏の、五劫思惟阿弥陀如来(法蔵菩薩)坐像への信仰の発掘により、近世から近代の庶民の真宗の浸透を明らかにしたいと、切に思うばかりである。

【註】

(一)「宝池山淨蓮寺」『砺波市史資料編4民俗・社寺』(一九九四年三月)。井波の淨蓮寺に関しては、この年代との整合性に問題を残す史料が存し、課題を残す(杉崎貴英「井

え込み、頭を前にうなだれて坐す像がある。しかしこれは実は苦行釈迦の像で、五劫思惟の阿弥陀像ではない」としているが、「憔悴像はおそらく真宗の系統にしか伝わらない独自の造形なのではないだろうか」とされる井上見淳氏の推察に納得できる。

真宗は弥陀一仏で、民間信仰や土着の庶民信仰が真宗の教えに消され、薄くなつてゐると思われている。事実その一面を充分に窺うことができる。しかし県全体の各種石仏の多さから、多様な民間信仰が庶民の心の奥底に脈々と流れていることを、石仏調査で知ることができるのである。

また、五劫思惟阿弥陀如来(法蔵菩薩)坐像のうち、紀年銘のあるものは一六体中に一一体ある。最も古いのが富山市岡田の「明治三十八年」であり、最も新しいのが立山町千垣の「昭和五十三年」である。紀年名のあるものは、七三年間に造立されたことがわかり、年次を見ると明治後期から大正期にかけての短期間による造立である。

江戸時代中期から明治期の東西本願寺末には多くの優れた学僧を輩出し、地方の教化が進んだ。幕末から明治期にかけては、いよいよ庶民に真宗が浸透した。県東部の旧大山町周辺では法蔵菩薩が盛んに造立されたのは、庶民の逞しさと真宗に根ざした信仰の証でもある。その象徴がこの石仏たちなのかもしれない。しかしこれらの信仰は、学塾の衰退や節談説法の禁止など、明治の真宗教学の近代化の陰で薄れてい

波・淨蓮寺の阿弥陀如来坐像について」『富山史壇』一七八、二〇一五年二月。

(2) 真宗新辞典編纂会編『真宗新辞典』(法蔵館、一九八三年九月)。

(3) 杉崎氏のほか、ドキュメンタリー映画作家青原さとし教信坊住職、ノンフィクションライター本田不二雄氏、北陸石仏の会長平井一雄氏等に教示を得る。

(4) 井上見淳「『五劫思惟の阿弥陀如来』肥満・憔悴論―玄雄師の論を手がかりにして」(『龍谷教学』四四、二〇〇四年三月)。

(5) 井上哲雄『真宗本派 学僧逸伝』(永田文昌堂、一九七九年九月)。

(6) 山田村教育委員会編『復刻山田村郷土史』(一九九三年三月)。

(7) 関山和夫『庶民文化と仏教』(大蔵出版、一九八八年八月)。

(8) 註(4)前掲論文。
法量 (cm)

總高	47.3
像高	19.0
台座の幅	35.8
台座の高さ	28.5
台座の奥行	23.6
本体の幅	18.4
本体の奥行	14.4
光背を付けた總高	54.2